

平成 22 年 5 月 30 日現在

研究種目：基盤（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520174

研究課題名（和文） 英語圏における「問答形式」の歴史的展開、および日本における英語教育への影響の研究

研究課題名（英文） A Historical Study of the Question-Answer Format As a Discourse Model and Its Influence over Teaching of English in Japan

研究代表者 阿部公彦 (ABE MASAHIKO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：30242077

研究成果の概要（和文）：本研究は言説の表現や流通の枠組みとしての「問答形式」に注目し、その歴史的な変遷を辿ろうとしたものである。主に焦点を当てたのは 16 世紀以降 18 世紀あたりまでの英国で流通した作法書だが、その具体的な派生として 19 世紀から 20 世紀にかけてのアメリカでの食事と作法との関わりについても考察した。とくにアメリカの作家バーナード・マラマッドの作品については「箇条書き」と「問答形式」という視点から詳細な分析を行い公表もした。また日本における英語教育との関連についても研究を行った。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I examined the question and answer format as a model that represents the way discourse is formulated and circulated. My approach was historical. I chose three centuries following the sixteenth and examined various kinds of so-called conduct manuals. More specifically, I studied the act of eating in the context of conduct manuals in the nineteenth and twentieth century US and discussed some of the stories of Bernard Malamud. I also did some research on the influence of the question and answer format over how English has been taught in Japan since the Meiji era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,300,000	720,000	4,020,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学、英語教育

1. 研究開始当初の背景

この研究のきっかけとなったのは「即興」に

ついての筆者の研究であった。そもそも筆者の眼目は、英語圏におけるメランコリーやヒステリアといった心理のフィクション性が

どのような推移を経て変容していったかを、「即興」という概念との関わりからあらためてたどり直すことであったが、この研究の過程で浮上したのが、メランコリー、ヒステリア、即興といった概念がいずれも、宗教史的なコンテクストを抜きにしては語れないということだったのである。

この問題をより深く考察する過程で生じてきたのが、問答形式との関わりである。言説が行為としてなされる際に、それを天啓とみなす考え方が「即興」というロマン主義的な作者信仰の土台となったとするなら、その一方で、16世紀の教理問答の流行以来、知のやり取りにおいてきわめて重要な方法となっていた問答形式もまた、言説が行為としてなされるときの重要なきっかけと見なされてきたのである。今回の課題の始点にあったのはこのような問題意識である。

2. 研究の目的

本研究は英語圏文化における「問答形式」を研究対象としたが、その目的には大きくわけてふたつあった。ひとつは歴史的な検証作業、もうひとつは現在我々が直面している英語文学教育・英語教育の状況に関する問題提起である。

1) まずひとつ目の歴史的な研究について。この作業においては、英語圏文化を中心に「問答形式」という言説のやり取りの方法がどのような推移をへて展開してきたかを、具体的な文献にあたりながらデータの集積を通して確認・実証し、ひいては問答形式を柱とした「もうひとつの西欧史」を構築しようとするものであった。このような言い方をあえてするのは、問答形式がヨーロッパ近代化の過程でキリスト教の見せた大きな変化、すなわち宗教改革と密接にからんでいるからである。16世紀、ルターらの影響のもと巻き起こった改革運動の中で、教理問答を通じた布教の方法は非常に重要な役割を果たした。宗教改革の最大の要点のひとつは信仰の「内面化」であり、それが近代的な個人の自我形成とも結びついていくわけだが、その際に教理問答的な教義との接触は、「知」の個人主義化とでもいうべき流れを生み出したのである。たとえば英国では1549年にはじめて欽定による *The Book of Common Prayer* に教理問答のセクションが収録されてからというもの、ごく短い間に海賊版を中心に何十という教理問答の版がちまたを賑わしたという事実があるが、こうしたことからわかるように、すでに社会一般に巻き起こりつつあった社会と個人との新しい関係の中に、教理問答という知識伝達の方法が、うまく取り入れられたという見方が出来る。

2) 次に、本研究のふたつ目の柱となった英語文学教育・英語教育に対する問題提起につ

いて。問答形式と我が国における英語教育との間には歴史的に見ても深い関係がある。明治初期の英語教育におけるキリスト教関係者の役割は大きかったが、そのこともあって、英語教育には宗教的な色彩が非常に強かった。英語の教科書に伝統的に問答形式が多く使われていることは、明治、大正と時代を追って英語教科書を分析してみれば一目瞭然のことだが、そこには間違いなく教理問答的な発想がからんでいた。これを敷衍させて考えられると、我が国においていまだに伝統的に踏襲されている英語教育や試験一般の方法の根幹にある「問い」と「答え」という枠組みは、実は、近代西洋に内在する問答形式的なイデオロギーそのものの反映だとも言えるのではないかと思われる。

こういうわけで、本研究は歴史的な検証作業を出発点としつつも、我々英語文学・英語教育関係者が今現在直面している状況をも批判的にとらえ直し、究極的には現在の日本における知識伝達のシステムそのもののあり方に一石を投ずる可能性を模索しようとしたものである。

3. 研究の方法

前項でもふれたように、この研究では「問答形式」の発現形態をややひろめに解釈することで対象領域を狭い意味での宗教書や作法書から広げ、場合によっては詩や小説などの文学作品をも対象として含めることにした。基本的な作業としては、これまで「問答形式」の代表的な例としてみられてきた作品についてあらためて検証を行うこととならんで、これまでそのような枠組みでとらえられてこなかった作品をもあらためて「問答形式」という物差しで読み直してみることを行った。基本となったのはデータの収集と検証だが、これに加え海外の研修者を含めたさまざまな分野の専門家と意見交換をかわすことで広く情報を集めるとともに、アプローチの方法の洗練にもつとめた。

4. 研究成果

本研究の対象範囲は歴史的にも地理的にもきわめて広く、短期間ですべての計画を達成することはもとより不可能なことであったが、本研究の第一の成果としてあげられるのは具体的なテキストの言説行為の中に、「問い」と「答え」という枠組みがどのようにして紛れ込んでいるかを具体的に明らかにしたことである。その成果の多くは2008年4月より「英語青年」に連載し(2009年4月よりは「ウェブ英語青年」で継続)、2010年3月にその一部を単著の形で出版した「英語文章読本」というシリーズである。これは小説や評論など広い意味での英語散

文を対象に、パンクチュエーションや、箇条書きなどの書記上の装置がどのようにして「問答関係」を織り込んでいるかを、文章の構造という視点から明らかにしたものである。テキストそのものは作家の個別作品だが、研究の背後にあったのは、16世紀から英語圏に流入した諸作法書の精神である。

この「英語文章読本」というシリーズは、それ自体が一種の問答的なやり取りを実演したものであり、文章上での実践を通して対象の抱える諸問題を表沙汰にするという狙いもあった。

これと平行して筆者が継続した書評シリーズ（紀伊國屋書店ホームページ上の「書評空間」）でも、具体的にテキストの中でどのように問答形式が活用されているかを分析しつつ、分析のスタイルそのものを通してある種の疑似問答形式を実践し、考察の足がかりとしたのである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ① 阿部公彦、「出だし① — レイモンド・カーヴァー「大聖堂」」、「英語青年」、2008年4月号、37-41、査読無
- ② 阿部公彦、「出だし② — フランク・オコナー「ある独身者のお話」」、「英語青年」、2008年5月号、97-101、査読無
- ③ 阿部公彦、「小さく言う — フィリップ・ラーキン『冬の少女』」、「英語青年」、2008年6月号、168-72、査読無
- ④ 阿部公彦、「強さ — ジョージ・エリオット『ダニエル・デロンダ』」、「英語青年」、2008年7月号、221-25、査読無
- ⑤ 阿部公彦、「スピード — ドリス・レスリング『黄金のノート』」、「英語青年」、2008年8月号、278-82、査読無

〔学会発表〕（計 1 件）

- ① 阿部公彦「キャントーズ45番の〈線〉」、日本エズラ・パウンド協会第31回大会、研究発表、於・早稲田大学、2009年10月31日

〔図書〕（計 2 件）

- ① 阿部公彦『英詩のわかり方』、2007年、研究社、pp.237
- ② 阿部公彦『スローモーション考』、2008年、南雲堂、pp.296

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者 阿部公彦
(ABE MASAHIKO)

研究者番号：30242077

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：

